

炎の美

NPO 法人 湖東焼を育てる会

湖東焼は、江戸時代後期に彦根で焼かれた焼物です。13代井伊直弼なおすけの頃には、彦根藩が経営する藩窯はんようとして黄金時代を迎え、当代の焼物を代表する高い完成度を示す焼物が焼成されました。ところが昨今では、「幻の湖東焼」と称されるほど、湖東焼の名前も作品も知られることが少なくなっていました。

私たちNPO法人湖東焼を育てる会では、これまで、湖東焼の講演会・展示会・絵付けえつけや作陶さくとうの体験教室など多様な事業を実施して、かつて彦根に華開はないた湖東焼の普及と啓発に努めてきましたが、今年度から、新たに調査研究事業として湖東焼窯場跡で採集された資料の整理作業を行っています。

「湖東焼窯場跡」採集品の整理作業を公開

10月25日(土)と26日(日)の両日、善利組足軽屋敷服部家住宅(彦根市指定文化財)をお借りして、見出しの整理作業の様子を一般公開しました。整理作業は、彦根市の文化財課で整理作業経験のある会員が指導する形で行われ、2日間でコンテナ13箱の洗浄作業を完了。現在は乾燥させた資料の分類と注記(採集状況などを資料の隅に小さく記入する)作業を行っています。このような整理作業が公開される機会はほとんどないため、見学者の関心は高く、作業する会員が見学者への説明に追われる姿が印象的でした。見学者数は25日(土):52人、26日(日):58人でした。

今後、下記のとおり再度、整理作業の公開を実施します。湖東焼窯場跡を紹介する展示、服部家住宅の公開も併せて実施しますので、関心のある方は、服部家住宅までお越しください。

【公開日時】11月22日(土) 10:00~15:00

【公開場所】服部家住宅(右地図参照)



湖東焼窯場跡を紹介する展示



湖東焼の「^{かま}窯」

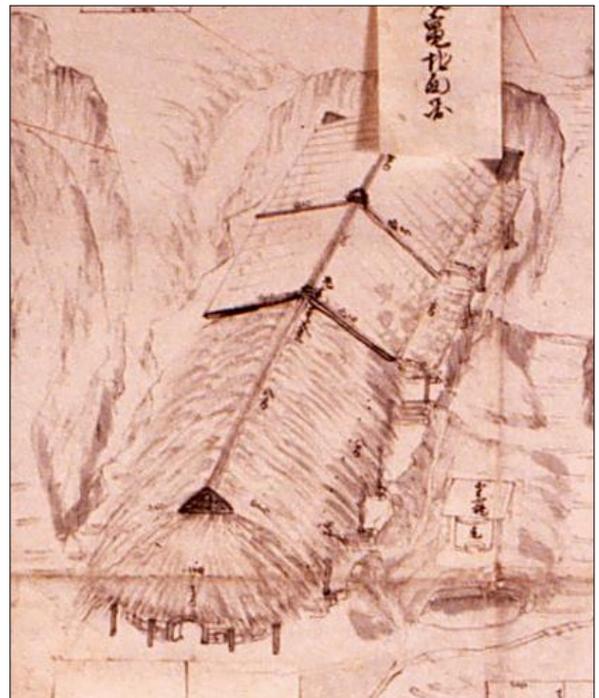
文政12（1829）年に、彦根城下の商人絹屋半兵衛らによって始まった湖東焼は、その5年後の天保5年には、早くも窯が破損し、彦根藩より資金の援助を得て窯の改築を実施しています。この際、窯は「丸窯」を廃して「古窯」に変更されました。

丸窯は、九州に起こり19世紀には各地に広がった登窯の一種です。窯室は古窯などに比べて、幅が広く天井も高い。炎を各室に伝える狭間の構造が横狭間であるのが大きな特色であり、各室の勾配が緩く、室の火度を平均に上昇させることができました。そのため、厚手で大型品の磁器焼成が可能となりますが、新材を多く必要としました。丸窯の名称は、天井がどの方角から見ても丸いことから命名されたと考えられます。

一方、古窯は桃山時代末に唐津から瀬戸地方へ伝わった登窯でした。窯の形状が小さく、薄手の小物の焼成には適していますが、大型品の焼成には向いていませんでした。当初は小窯と書いたようですが、のちに丸窯が導入された頃から、古窯の字を当てるようになりました。

絹屋が当初の丸窯を廃して古窯を選択したのは、薄手の小物を主体に焼成するなら燃料費の節約できる古窯が適していると判断したのでしょう。赤字経営に傾きがちだった絹屋にとって、採算を取るためには燃料費の節約は重要な意味を持っていました。

ところが天保13（1842）年、絹屋窯は彦根藩に召し上げられ、藩の直営（藩窯）となります。そして3年後、古窯は再び丸窯となり、以後、丸窯の室が5間から7間、次いで7間から9間へと増設を繰り返します。絹屋が苦慮した採算よりも、厚手で大型の良品を安全に確実に焼成できる丸窯へと経営方針が大きく転換したことを物語っており、室の増加は、その方針での増産を意図したものでした。こうして湖東焼は黄金時代を迎えます。窯の構造の変遷は、湖東焼の経営方針、そして湖東焼の製品とも密接に繋がるものだったのです。



「湖東焼窯場絵図」(たねや美濠美術館蔵)
に描かれた安政2年(1855)の「丸窯」